

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Scholarly Contributions by Bronisław Piłsudski : Bronisław Piłsudski's Contributions in Balt-Slavic Folklore

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003754

バルト・スラヴ民俗学におけるピウスツキ

伊 東 一 郎*

シベリア民族学者として知られるブロニスワフ・ピウスツキはザコパネに帰還後ポーランド民俗学とバルト民俗学にかかわる論文をそれぞれ一篇ずつ発表している。本稿の目的は従来比較的顧みられることの少なかったこのピウスツキのバルト・スラヴ民俗学に関する業績の紹介と位置付けならびに評価である。

1. 「リトアニアの十字架」

バルト民俗学に関する彼の業績はリトアニアの民衆芸術として十字架を取上げた「リトアニアの十字架」で、ポーランド語とフランス語の二つのヴァージョンがある。最初に発表されたのはフランス語版で、Ginet-Pilsudski B., *Les croix lithuanienes, Archives suisses des traditions populaires* T.XX, 1916 [PIŁSUDSKI 1916a] である。ポーランド語のものは Pilsudski B., *Krzyże litewskie*, (Biblioteka “Orlego lotu” Nr. 3), Kraków, 1922 [PIŁSUDSKI 1922] であるが、内容はフランス語と全く同じであり、発表時期が彼の死後であることを考えあわせると、フランス語版の翻訳であると考えられる。

フランス語版のテキストにはズヴィグロツキによる図版が付せられているが、執筆当時ピウスツキが本稿執筆のためにリトアニアを訪れた形跡はなく、本稿は彼のフィールド・ワークの成果ではなく、主に文献と幼少時の記憶によるものと思われる。

論文の紹介に移る前にまずリトアニアとリトアニア人について簡単に述べておこう。

リトアニア人は印欧語族バルト語派に属する言語であるリトアニア語を母語とする民族である。自称はリェトゥヴィアイ (Lietuviai)。ロシアの年代記は10世紀前後にバルト海沿岸地域に居住していたバルト諸族の名を記しているが、それらのうちジムヂおよびリトワが後のリトアニア人となった。13世紀に統一国家を作り、14世紀にポーランドと連合した。このためポーランドのカトリック文化の影響を強く受け、現在もカトリックが最も優勢な宗教となっている。18世紀末にはポーランドと共にロシア

* 早稲田大学文学部 本館共同研究員

領となる。ピウスツキのこの論文が書かれたのはこのような状況においてである。二度の世界大戦でドイツに占領されたが、両大戦下に独立を達成した。1940年にソビエト連邦に加盟し、リトアニア共和国となる。

同じバルト族の国ラトヴィアとは異り、リトアニアは14世紀以来ポーランドの強い影響下に入り、貴族・知識人は公用語としてはポーランド語を用いてきた。またこの14世紀以来リトアニアは事実上のポーランド領となり、ミツケヴィチを初めとする多くのポーランドの文学者・知識人を生みだしている。

ピウスツキのこの論文はリトアニアの民衆芸術の特異なジャンルとして知られる十字架を取上げている。これはリトアニアの道端にしばしば見出されるもので、木彫りの装飾で飾られた彫刻などを伴っていた。そのなかでもおそらくポーランド起源のものと思われる「悲しみのキリスト」のモチーフはきわめて普及していた [NARODY EVROPEJSKOJ ČASTI SSSR II: 93]。これは単純なラテン式の十字架が前キリスト教的な装飾の影響下に変形を重ねて、一種の祠のようになったものである。

本論文の冒頭でピウスツキはリトアニアの民族史的な概観をし、論文執筆当時の戦渦を案じて、戦争を大国が止めなければヨーロッパは墓と十字架の国になってしまうだろう、と述べている。この書出しは、死の直前のこの時期にピウスツキが「十字架」というテーマを取上げたことと考え合せても暗示的である。そして彼の原稿執筆の動機は明らかに当時のロシアの辺境に過ぎなかったリトアニアの民族的独立性を民俗学的に示すことにあった。彼の生まれたズーウフは現在のリトアニア共和国の首都ヴィルニウスの近郊であり、リトアニアは彼の故郷であった。またピウスツキ家の家系はリトアニアの公爵家の出であったという伝説があり、リトアニアは彼にとって単なる地理的な意味での故郷に留まらず、民族的アイデンティティーにもかかわる土地だったのである。

本論でピウスツキは造型芸術としての十字架を形態論的・歴史的に分類し、十字架上の装飾の意味論的分析を行っている。ピウスツキはこの十字架上の装飾をキリスト教以前の異教的シンボリズム、特に太陽を中心とした天体崇拜と結びつけて論じているが、これは妥当なところであろう。リトアニア神話の特徴の一つはそれが天体神話を核として構成されていることにあるからである。またこの十字架は婚礼に際して、疫病の蔓延した時、収穫を祈願する時などに立てられ [GIMBUTAS 1963: plate 79]、その本質は明らかに非キリスト教的なものである。ピウスツキはこの様々な機会に十字架を立てるリトアニアの習俗の中に森林崇拜の影響をも見ている。

本論の締めくくりとしてピウスツキは、異民族であるロシアの支配下にあるリトア

ニア民族の文化的独立の象徴として、これらの十字架を保存し守っていくことを訴えるのである。

さてここでリトアニア民俗学における本論の位置について考えてみよう。ポーランド人の学者でリトアニアの十字架に注目し、最初に論文を書いたのはシュキェヴィチ W. Szukiewicz で、その「ヴィルニウス県における装飾的十字架」*Kryże zdobne w gubernji Wilenskiej* [SZUKIEWICZ 1903] は“*Wista*”の17号(1903)に発表されている。その後ブレンシュテイン M. Brensztejn の著書『ジムーヂ県の十字架と祠——リトアニア民族芸術資料』*Krzyże i kapliczki żmudzkie. Materiały do sztuki ludowej na Litwie* [BRENSZTEJN 1906] が1906年にクラクフで出版された。次にバサナヴィチウス J. Basanavičius のリトアニア語の著書『考古学から見たリトアニアの十字架』*Lietuvių kryžiai archeologijos šviesoje* [BASANAVIČIUS 1912] がヴィルニウスで1912年に発行される。リトアニアの十字架を扱った著作としてはピウスツキの論文はこれに次ぐものであり、西欧の言語によるものとしては最初のものと思われる。以上の先人の著作は彼の論文にたびたび引用されている。

内容的には、本論文は有名な彼のアイヌあるいはギリヤーク関係の論文のように長い住込み調査の結果書かれたものではなく、問題提起的な論稿というよりは多分に啓蒙的な性格のものである。その意義は従って西欧の言語によっておそらく初めてこのリトアニアの民衆芸術を紹介した点にあると言えよう。その後現われた西欧語で書かれたリトアニア民俗学関係の著作には彼の本論文はたびたび参考文献として取上げられている。例えばリトアニア出身の美術史家ユルギス・バルトルシャイティス Jurgis Barturšaitis はその著書 *Lithuanian Folk Art*, München, 1948 [BARTURŠAITIS 1948] の一章を「十字架と祠」にあてているが、その章の文献目録の中にこのピウスツキのフランス語論文をひいている。

2. 「ポーランド・タトラ山系における高地牧畜」

ピウスツキのスラヴ民俗学に関する、即ちポーランド民俗学に関する業績は主にザコパネのタトラ博物館における彼の活動と結びついている。しかし論文の形で彼が書き残したのはドイツ語で書かれた Ginet-Pilsudski B., *Almen-Viehzucht im Tatra-Gebirge in Polen*. 「ポーランド・タトラ山系における高地牧畜」*Schweizerisches Archiv für Völkerkunde*, Band XX, 1916 [PIŁSUDSKI 1916b] のみである。著者の名に続けてタトラ協会民族学部門主任という肩書きが付されている。興味深いことはこ

の論文が、上述の「リトアニアの十字架」と同じく『スイス民族学アルヒーフ』のしかも同じ号に使用言語を変えて発表されていることである。ここには外国での生活の安定を求めている業績作りに努めるピウスツキの急迫した状況がうかがえる。

論文紹介の前にまず論文の対象となっているタトラ山系について説明しておこう。普通タトリと複数形で呼ばれるこの山系は、ポーランドとスロヴァキアの双方にまたがるカルパティア山脈中の最も高い山系で、その最高峰は2655メートルのゲルラホフスキ＝シュピット山である。ポーランド側には現在タトラ民族公園があり、その中心はザコパネである。この地方にはグラレーと呼ばれる山岳民が住み、独特な牧民文化を展開していた。この地方に牧羊を伝えたのはグラフと呼ばれるロマンス系の牧羊民である。彼らはこの地域に15—16世紀に植民してきて羊と山羊の飼養を広めた。この地域では現在に至るまで羊の季節的移動が行われている。ポドハレの村からタトラ山系に向うのがそのルートである [NARODY ZARUBEŻNOJ EVROPY I: 104]。

本論文も既に紹介した「リトアニアの十字架」と同様に愛国主義的な動機から書かれていることはその文章からも伺える。ロシア領であった故郷リトアニアに対して彼が民族学者として活動したザコパネは19世紀以来オーストリア領だったのである。

ピウスツキ自身の注釈によると本論文に付せられたイラストは1901年に発行されたマトラコフスキ W. Matlakowski の『ポドハレのポーランド人の装飾と民具』*Zdobienie i sprzęt ludu polskiego na Podhalu*, Warszawa, 1901 [MATLAKOWSKI 1901]から取っており、筆者の調査ではテキストさえもかなりの部分がこの著作の「牧畜」の章(116-134 ページ)に負っている。ちなみにこのマトラコフスキの著書は上述の「リトアニアの十字架」にも引用されている。

さてこの論文はタトラ山系の牧羊民の牧畜生活、チーズ作りの実際とフォークロアを紹介したもので¹⁾、上記「リトアニアの十字架」と同様、啓蒙的性格の強い論文である。そこには1912-3年のザコパネにおける彼のフィールド・ワークの成果がある程度反映されていることは明らかであろうが、しかし彼がザコパネで採集したといわれる民謡、諺、民間医療などについてのデータ [KAPELIUS, KRZYŻANOWSKI 1982: 586]は引用されていない。おそらく彼はザコパネを去る時に自分の採集したデータを持ち出したり、筆写したりすることができなかったのであろう。このために本論文では多分に記憶と、おそらく彼の手元にあったマトラコフスキの著書に頼らざるを得なかったのではあるまいか。

1) ポーランド・タトラ山系の牧羊民のチーズ作りに関するビデオ＝テープが国立民族学博物館に所蔵されている。参照されたい。また本論でピウスツキが紹介しているフォークロアには「タトラ山の眠る騎士」の題で邦訳がある [小沢 1977: 149-156]。

3. 結 論

全体として言うならば、繰返しとなるが、以上の二つの論稿は、彼のアイヌやギリヤークについての論文のような、長期にわたる観察と研究に基いた論文とは異なり、多分に啓蒙的・紹介的な論文であると言えよう。それはしかし当時彼が置かれていた状況を考えればやむをえないことであつた。またそのリトアニアとザコパネの民族文化の紹介は、この両地域のロシアとオーストリアからの民族的独立を訴える、という社会的な側面を持っていたことが文章表現から伺えるのである。そして当時リトアニア、ザコパネ両地域に関する西欧語による紹介論文が少なかったことを考えるならば、これらの論文は当時の西欧の学界にとっても、「民族の独立」というピウスツキ自身の悲願にとっても一定の意味を持つものであつた、ということが言い得るであろう。

文 献

- BARTRUŠAITIS J.
1948 *Lithuanian Folk Art*, München, T. J. Vizgirda.
- BASANAČIUS, J.
1912 *Lietuvių kryžiai archeologijos švietimoje*. Vilnius.
- BRENSZTEJN, M.
1906 *Krzyże i kapliczki żmudzkie. Materiały do sztuki ludowej na Litwie*. Kraków.
- GIMBUTAS, M.
1963 *The Balts*. London, Thames and Hudson.
- KAPELIUS H., KRZYŻANOWSKI, J. (red.)
1982 *Dzieje folklorystyki polskiej 1864–1918*. Warszawa, Państwowe wydawnictwo naukowe.
- MATLAKOWSKI, W.
1901 *Zdobienie i sprzęt ludu polskiego na Podhalu*. Warszawa, J. Peszke.
- NARODY EVROPEJSKOJ ČASTI SSSR II
1964 *Narody evropejskoj časti SSSR II*, Moskva, “Nauka”.
- NARODY ZARUBEŽNOJ EVROPY I
1964 *Narody zarubežnoj Evropy I*, Moskva, “Nauka”.
- 小沢俊夫 (編)
1977 『世界の民話 (東欧Ⅱ)』東京：ぎょうせい。
- PIŁSUDSKI, B.
1916a Les crois lithuaniennes. *Archives suisses des traditions populaires*, T.XX: 1–13.
1916b Almen-Viehztucht im Tatra-Gebirge in Polen. *Schweizerische Archiv für Völkerkunde*. Band XX: 1–12.
1922 Krzyże litewskie. *Biblioteka “Orlego lotu”*, Nr. 3: 1–21.
- SZUKIEWICZ, W.
1903 Krzyże zdobne w gubernji Wilenskiej. “*Wisła*” 17.